巻頭言

「愛の傘」

立教小学校チャプレン　下原　太介

４月３日、この春から立教小学校最上級学年となる新６年生の児童たちに対して、ある一通の連絡が立教小学校から出されました。その連絡とは、「明日（4/4)、立教大学タッカーホールで開催される立教小学校入学礼拝は雨天が予想されるため、新６年生児童は傘を忘れずに登校してください」という趣旨のものです。“子どもたちに「明日は雨が降るから、傘を忘れないようにね」っていう連絡を前日にしてくれる学校なんてあるの？立教小学校は、そこまで手厚く、優しいの？？”と思われるかもしれませんが、さすがの立教小学校でも、登下校のためのお天気ガイダンスのような連絡を毎日、児童たちにすることはできません。ましてや、小雨や多少の雨降りならば、気にも留めず、傘も差さずに登下校する豪快な児童たちも少なくない立教小学校。そのような児童たちにとっては、「明日は雨が降るから、傘を忘れないようにね」という連絡が常日頃、学校から届いたとしても、あまり意味を成さないのかもしれません。

しかし、その日の連絡は、登下校のためのお天気ガイダンスのようなものではありませんでした。

翌４日、天気予報通り、立教小学校入学礼拝が始まる頃には辺り一面、雨露に濡れ、傘は必須という状況でした。そのような雨の中を、新６年生の児童たちは前日の小学校からの連絡を受け、持参した傘を差し、待機場所であったモリス館から入学礼拝会場であるタッカーホールへと歩いていました。しかし、彼らの肩は、頭は、天から降る雨で濡れ続けていました。全員が、傘を差しているのに…。

実は、その時、彼らは自らが持参した傘を自らのために差してはいませんでした。彼らが差す、その傘の下には、彼らに手を引かれ、その日、立教小学校に入学する新１年生一人ひとりがいたのです。自分自身のことなら、小雨や多少の雨降りなど気にも留めない豪快な彼らが、その日は、新１年生の小さな、小さな手を優しく握り、小さな、小さな歩幅に歩みを合わせ、小さな、小さな頭の上にしっかりと傘をかざし続けていたのです。やはり、その時も、自分自身が濡れることなど気にも留めずに。

立教小学校の入学礼拝では、毎年、新６年生が新１年生の手を引いて、礼拝会場まで一緒に向かうということが、とても大切にされています。そこには、新しく立教小学校の家族となる新１年生に対する歓迎の気持ちと、出逢いの奇跡を与えてくださった神に感謝し、その出逢いを心から大切にしたいという想いが込められているからです。

そうなのです。ですから、前日、小学校から彼らに送られた「明日は雨が降るから、傘を忘れないようにね」という連絡の真意は、「明日、あなたたちが手にする傘は、誰のために差す傘なのか、よく考えてね。それをよく考えたら、傘は忘れられないよね？明日、あなたたちは、誰のために入学礼拝に参列するのか、それを心に留めて、登校してね」というものなのです。

当日、彼らが新１年生の上に高く掲げた傘と、彼らの濡れた肩と頭とが、小学校からのメッセージをしっかりと受け留め、理解していることを証していました。それでも、誰しもが完璧ではありません。傘を忘れてしまった新６年生もいました。その彼は、自分の着ていた制服のジャケットを脱ぎ、新１年生の頭の上に優しくかざし、雨をしのぎ、肩を抱いて歩いていました。この光景が、立教小学校79年目、2026年度の始まりの景色です。そして、同時に、これが「キリスト教に基づく人間教育」を建学の精神に据える立教学院が謳う、一貫連携教育を受ける人間の第一歩目の歩みです。

立教学院による一貫連携教育という16年に亘る人間形成は、誰かに手を引かれて歩み始めるこ

と、誰かに傘を差してもらうこと、そのことへの感謝をもって、５年後に、誰かの手を引いて共に歩むこと、誰かのために濡れること。この両者が重なり合う一日から始まるのです。手を繋ぎ合い、共に歩み、その途上で、時に相手のために犠牲となり、時にその相手の犠牲によって生かされる。立教学院において、毎年、毎年、これが繰り返され、その連続・継続の中で、児童・生徒・学生は、愛のもとで「共に生きる力」を養うのです。

そして、歳月と学びの深まりと共に、愛のもとで共に生きた経験は、必ず、愛に関する高次元の探求へと児童・生徒・学生を誘(いざな)うはずです。“あの日、自分はなぜ、あの人に手を握ってもらえたのか？５年後、自分はなぜ、あの人の手を握ってあげられたのか？”、“あの時、なぜ、あの人は私のために濡れてくれたのか？あの時、なぜ、私はあの人のために傘を差せたのか？”、“それら全ての源が「愛」だと言うのなら、その「愛」とは一体、何なのか？”。これらの問いが、「人間の尊厳や価値」、「生きる意味」、「人間としていかに生きるか」ということへの問い直しを促し、愛と「真理を探求」する道となり、その道の先にイエス・キリストという存在を見出すことに繋がります。

そして、きっと、最後に気づくのです。“私は、愛と「真理を探求」した道の先にイエス・キリストを見出したのではなく、愛と「真理を探求」するただ中で、私はずっと、イエス・キリストに手を引かれていた。イエス・キリストは、ずっと私のために濡れてくれていた。その愛に突き動かされて、私は誰かを愛してきた、愛することができた”と。そう感じることができた時、「キリスト教に基づく人間教育」は終わりを告げ、キリスト教に基づく生涯、イエス・キリストの愛に基づく人生が始まります。

この春、立教学院を通して、愛と「真理を探求」する歩みを始めた全ての方々へ、あなたの手は、イエス・キリストに握られています。あなたの頭上にはイエス・キリストにより愛の傘が掲げられています。そして、あなたが、この世界に記し、残す足跡の、そのすぐ隣には、常にイエス・キリストの足跡もあるのです。立教学院での学びの、その道の先で、いつか、そのことに気づいてくだされば、心から嬉しく思います。

最後に、有名な詩を皆様へお贈りさせてください。

「あしあと」

ある夜、わたしは夢を見た。
わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。
どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。
ひとつはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。
これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、
わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。
そこには一つのあしあとしかなかった。
わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。
このことがいつもわたしの心を乱していたので、
わたしはその悩みについて主にお尋ねした。
「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、
あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、
わたしと語り合ってくださると約束されました。
それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、
ひとりのあしあとしかなかったのです。
いちばんあなたを必要としたときに、
あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、
わたしにはわかりません。」
主は、ささやかれた。
「わたしの大切な子よ。
わたしは、あなたを愛している。
あなたを決して捨てたりはしない。
ましてや、苦しみや試みの時に。
あしあとがひとつだったとき、
わたしはあなたを背負って歩いていた。」

マーガレット・F・パワーズ
松代恵美 訳

Translation copyright（C）1996 by Pacific Broadcasting Association